知識探訪　多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会（JAMS）

何がツバメの巣の価値を決めるのか

佐久間 香子（東北学院大学経済学部准教授）

サラワク州クチンにある華人が経営する乾物商店の店内（筆者提供、2018年2月撮影）

ボルネオの森は、金に勝るとも劣らない価値を有する資源を人間に提供し続けてきた。中でも私の心をつかんで離さない資源がツバメの巣（sarang burung）である。

長寿や子孫繁栄に加えて、女性の健康と美容への効果が期待されるツバメの巣は年々その価格が上がっており、2018年に訪れたサラワク州の州都クチンのとある乾物商店では、贈答用のツバメの巣1箱（6つ入り）が220リンギ（現在のレートで約6,400円）で販売されていた。店頭販売価格は首都クアラルンプールではより高くなり、香港に行くとサラワク州では考えられない高値がつけられる。

ツバメの巣市場の拡大に伴ってマレーシアでは、沿岸部の岸壁や森林地帯の洞窟における採集活動に対して、生態系に配慮した採集方法や採集ライセンス制度が各州で整備されるようになっている。さらに、養殖の手法、適切な評価方法、トレーサビリティー（生産履歴追跡）を含めた流通システムもアップデートされてきた。

では、この高級品を扱う商人たちは、どのように「商品」をランク付けしているのだろうか。森の男たちが命懸けで採集したものは、彼らの期待するように高い値が付くのだろうか。かくして、ずっと森の中で調査してきた私も町に下りて、仲介商人や商店を訪ね回ることにした。

洞窟で採集されるツバメの巣には大きく「白い巣」「黒い巣」がある。それぞれ別の種のアナツバメである。商品としてツバメの巣の価値は何より見た目の美しさで決まるため、最高級に位置付けられるのは、少し透き通った美しい「白い巣」だ。

ところが、採集者にとっても、また商人や消費者にとっても商品価値が高くないはずの「黒い巣」が、時として「白い巣」を上回る可能性を持っていることをご存じだろうか。これは、「黒い巣」の市場価格と仲介商人が採集者から買い取る価格には違った価値基準が作用しているからである。

どういうことかというと、アナツバメは年に数回（平均3回）営巣するといわれており、何回かに1回は、主成分である唾液以外に血液が混入することがあるという。この血液混じりのツバメの巣を「赤い巣」（red nests）あるいは「血の巣」（blood nests）といい、特別に強力な効力があるとされている。この付加価値によって、商品価値の低いはずの「黒い巣」が、たちどころに「白い巣」を抑えて最高級ランクの商品に大躍進を遂げることになるのだ。

つまり、仲介商人たちにとって「黒い巣」は、採集者から「白い巣」に比べて格段に安く購入することができる上に、運良く「赤い巣」が混入していれば、「白い巣」の何倍もの高値で転売できるものもある。このことから、「黒いままでも商品になり、大当たり（赤）が入っていればもうけもの」という、ハズレ無しの大変ありがたい資源でもあるのだった。

さぁ、これを森の人たちが聞いたらどう思うだろう？

＜筆者紹介＞
1982年京都府生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科終了。博士（地域研究）。専門は文化人類学。サラワク州（ボルネオ島）内陸部で、国立公園のそばに暮らす人びとの資源利用と歴史を研究。近年は、森の中の洞窟で採れたツバメの巣を追いかけて、サラワク州の沿岸部、クアラルンプール、中国・広州、香港などにも足を運んできた。著書に『ボルネオ 森と人の関係誌』（春風社、2020年）

Copyright(C) NNA All rights reserved. 記事の無断転載・複製・転送を禁じます